

グリム童話における女主人公

—— 受動的と能動的人物像の間に ——

小林 繁 吉*

Heldin der Grimms Märchen

—— Zwischen der passiven und der aktiven Hauptfigur ——

Shigekichi KOBAYASHI

Abstract

Dornröschen, die hundert Jahre lang schläft und nur auf seinen Königssohn wartet, und Sneewittchen, die den giftigen Apfel gegessen hat, im Sarg von Glas frisch wie ein lebender Mensch liegt und seinen Prinzen erwartet, gehören zu der perfekt passiven Märchenfigur der Brüder Grimm. Jungfrau Maleen, die gegen den Befehl des Vaters für ihren Geliebten keinen anderen heiraten will und ihren Willen durchgesetzt hat, und die kluge Bauerntochter, die ein von dem König aufgegebenes Rätsel durch ihre Weisheit lösen und zur Königin werden kann, sind das genaue Gegenteil des oben gesagten passiven Charakters und aktiv, weise und energisch. Lenchen im »Fundevogel«, das Zauber treibt und eine böse Hexe tötet, um ihrem liebsten Fundevogel zu helfen, und ein schönes Mädchen mit langen blonden Haaren im Märchen »Der gläserne Sarg«, das den Mut hat und den zauberkräften furchtbaren Fremden mit Pistole schießt, treten als Heldin zwischen der passiven und der aktiven Hauptfigur auf. Dieser neue Zwischencharakter zwischen der passiven und der aktiven Märchenhauptfigur ist in den Märchen der Brüder Grimm zu forschen.

Keywords: Grimms Märchen, Heldin, passiv, aktiv, Zwischenfigur

はじめに

フェミニズムの観点からは、グリム童話の中の「いばら姫」¹⁾や「白雪姫」²⁾は、究極の受動態³⁾を体現していると言われている。いばら姫は100年の間ただ眠っているだけ——つまり、何も行動していない、最も消極的活動——であり、王子の来訪を待っているだけであり、非活動的存在の極致である。現代の女性で言えば、白馬にまたがってやってくる王子をただ待っている、ほとんど自分の方からの働きかけをしない、すばらしい結婚を夢み、待っているだけの存在と見なされている訳である。白雪姫の方も、自

分を殺そうとする悪い継母の手から逃れて小人の家をやってきた後は、小人の言いつけを三度とも守らず、継母の手にかかって三回死に、三回生き返る。三度目は毒のりんごを食べ、死後、ガラスの棺の中で腐りもせず生きてまま死んだように眠り——グリムのメルヒェンでは、死んだ人物が生き返ったりすることは特別なことではない——究極の受動態となって、ただただ救い手の王子を待っている存在という訳である。

ダイアナ・コールスの『アリーテ姫の冒険』⁴⁾においては、その正反対の女主人公が登場し、フェミニズム童話の真価を発揮している。女主人公はいばら姫や白雪姫と異なり、自分の才覚、自分の独立した考えに基づいて、自分で難題を乗り越えて行く。そこには、現代のフェミニズ

平成19年1月5日受理

* 環境建設工学科・教授

ム童話の代表作として、積極的能動的活動的知的で、勇気や冷静沈着さもある女主人公の活躍があり、いばら姫や白雪姫の物語とは全く異なり、救助者としての白馬の王子は登場しない。むしろ、登場する王子たちにはその資格すらないのである。

この究極の受動態を具現した主人公の対極にあるアリーテ姫のような女主人公は、イデオロギー分析的視点によれば、グリム童話の中には出現しえないということであろう。グリム童話に色濃く表れているピーダーマイヤー的世界観・人生観が影を落としているというのであるが、たとえば、女は家で炊事・洗濯・掃除などの家事を行い、男は外で仕事をする、という19世紀から20世紀にかけて先進文明国に現われてきた一般的価値観が入り込んでいるという訳である⁵⁾。グリム童話をもとに作られたウォルト・ディズニー製作の世界最初の長編アニメーション映画『白雪姫と七人の小人』⁶⁾の中に描かれている白雪姫がその典型像となっているのもうなずける。市民社会の勃興期にグリム童話の受容がはじまり、現在、聖書の次に先進文明国を中心に読まれている書物になっているのは、このようなイデオロギーの刷り込みが効を奏しているという訳である。

本論文は、確かに、1857年のグリム童話第七版最終決定版200話中の大部分がそのようなメッセージを伝えているにしても、必ずしも一般に言われているように、グリム童話のほぼすべてに、フェミニズムの側から言う究極の受動態、意志のない操り人形としての女主人公ばかりではなく、ある程度意志を持った女主人公もいることを指摘し、受動的な女主人公を再検討してみようとするものである。

付随して、比較文学的観点から、たとえば、ペローとグリムの赤ずきんの対比や、バジーレとグリムの話の類比において言及されるエロティックな描写の消去および弱体化に関しても再吟味し、いわゆるエロティックな描写の排除された純潔度の高いグリム童話が完全に成立し

ているのかどうかも考えてみたい⁷⁾。

その際、グリム童話における魔法による変身や魔法アイテム（魔法の小道具や大道具）が重要な役割を果たすので、特に魔法と関連性の深いグリム童話「みつげ鳥」⁸⁾「ガラスの棺」⁹⁾を重点的に取り上げながら、果たして女主人公が白馬の王子によって救われ、彼との結婚によってハッピーエンドになっているのかどうか。また、受動のお姫様や女主人公がほとんどで、それ以外の女性の主要登場人物は出現してこないのか。もう一度考えてみたいと思う。

1.

一般に言われていることであるが¹⁰⁾、グリムの「マレーン姫」¹¹⁾は、唯一グリム童話らしくない女主人公マレーン姫が登場してくる。グリム童話中のお姫様は王様の言いつけには決してそむかない。本当は嫌な場合でもほとんど意志を持たない存在となって、内心嫌々ながらも王様や父親のような家父長的登場人物の言うことに最終的には従う。しかし、マレーン姫はきっぱりと父王がすすめる結婚相手を拒み¹²⁾、苦境に落ち入ってしまう。

これは確かにグリム童話の女主人公の中では異質なお姫様であり、それゆえ特筆に値する物語となっている。それではグリムの最終決定版童話集の女主人公でこれに類する人物は皆無かということ、何人かいるのである。

たとえば、「恋人ローラント」¹³⁾の中の器量よしで気だてのやさしい継娘は、世話になった羊飼いに求婚されてもきっぱり断り¹⁴⁾、厳しい状況の中、恋人ローラントと結婚する。これはむしろ受動的というよりは能動的積極的娘の行動と読み取れる。

また、「りこうな百姓娘」¹⁵⁾の女主人公は、自分の知恵と才覚で幸せをつかむ。父親の貧乏な百姓の危機的状況を、自分の頭を使って解消し、王様の出したなぞを解く。「着物を着ず、はだかにならず、馬に乗らず、車に乗らず、道を通ら

ず、道はずれず、わしのところへ来なさい。それができたら嫁にしよう。」と言ったのに対し、着物を脱いでほかにかり、魚を捕る大きな網の中に入り、ろばのしっぽに結びつけて、足の指だけで地面を通り、なぞを解き、王様と結婚し、王様の妃になる。この女主人公は頭がいいだけではなく、積極的で楽観的で行動的な娘として描かれている。しかも、結婚後に、自分の夫である王様が、争いごとにおいて理不尽な裁定を下すのに対して自分の意見を通す。王様としては男の沽券にかかわるといふことであろうか、権威者としてのプライドにかかわるといふことであろうか——現代でも十分あり得るシチュエーションである——妻である妃を離縁するというのに対して、堂々と「自分の願いを一つだけ聞き入れてください。」¹⁶⁾と言って、王様の横暴を正し、さらに愛情を確認させてしまうという至難の業をやりとげてしまう。

これはとても受動的消極的な女主人公ではないし、また魔法も使わない主人公であり、その意味では、究極の受動態の対極にある能動的活動的積極的な主人公の典型と言えらる。この女主人公は7歳の白雪姫や15歳(?)のいばら姫、幼い赤ずきんと異なり、成熟したもののおとなの女性として描かれていると言えらる。グリム童話の中にこのような女主人公が存在することはある意味驚嘆に値することである。

話を「マレーン姫」¹⁷⁾にもどすと、彼女は七年間も真っ暗な塔の中に侍女と共に入れられ、自力ではい出し、偶然の出来事も幸いするのであるが、魔法アイテムも用いず、やはり自分の知恵と才覚で苦境を乗り越え、絶望的状况の中でも、決して望みを捨てず、恋人の王子と結婚する。この話は結婚というハッピーエンドで終わっているが、マレーン姫も意志の強い、行動的で積極的なおとなの女性なのである。

上述の「恋人ローラント」¹⁸⁾の女主人公は魔法(魔術)を使って難題を解決し、恋人ローラントと結婚する。継母の魔女に殺されそうになった時、機転をきかせ

て継娘を身代わりにし、魔女の継母の魔法の杖を取ってきて、血で魔法をかけ魔女の追跡をかわそうとする。魔法の杖で変身を繰り返す¹⁹⁾、継母の魔女をやっつけてしまう。この娘も知恵の働く積極的な娘と言えらるのではないのだろうか。そして大事なことは、恋人ローラントとの再会の際に魔法は使わなかったということである。安易に魔法に頼ってしまう主人公は能動的で積極的とは言えなからである。「恋人ローラント」の女主人公は、その意味で、生きていくために必要最小限の、命を守るために、自己防衛のために魔法を禁欲的に使ったという意味で、現代的な——フェミニズム風の表現で言う——能動的積極的で知的な女性といふことができよう。

また、「腕きき獵師」²⁰⁾では、お姫様が父である王様の言いつけにそむき「父上、この人のところへ嫁に行くくらいなら、私の歩ける限りどこでも歩いて行った方がよろしいです。」²¹⁾と言って、勘当され、大変な苦勞をする。主人公の獵師はグリム童話中に典型的な積極的行動的ヒーローと言えらるが、女主人公とも言うべきお姫様が、悪意を持った醜い相手との結婚を、父王の意志に反してきっぱり結婚しないと断っているのは、たとえ獵師に結果として助けられるにしろ、受動的ヒロインではなく能動的ヒロインに属すると言えらる²²⁾。

このように、グリム童話の中には、〈いばら姫〉や〈白雪姫〉のような受動的タイプの女主人公だけではなく、〈マレーン姫〉や〈くりこうな百姓娘〉のような能動的なタイプの女性も描かれているのである。

2.

そして実は、いわゆるメルヘンチックな(純粋童話風な)受動的な女主人公が、白馬にまたがる王子様に救われ結婚してハッピーエンドになるという典型的グリム童話のタイプと、その反対の対極に位置する、独立した意志をもつ、あ

る意味現代の女性の身の処し方に通じている、能動的女主人公の才覚によって様々な苦難を乗り越えて行くタイプの話のほかに、もう一つ別な物語のタイプを想定できるのではないか。すなわち、この両者の中間に位置する物語と見なしうる第三のタイプのグリム童話である。

最初に「みつけ鳥」²³⁾を例に取り、その後「ガラスの棺」²⁴⁾を取り上げ、この二つの話を中心にして考察し、その可能性を探っていきたい。

「みつけ鳥」²⁵⁾では、森の山番の娘レンヒェンが、鶯のような鳥にさらわれた子(みつけ鳥)が山番の家の料理人のおばあさんに食べられそうになるのを魔術を用いて助ける話である²⁶⁾。レンヒェンはみつけ鳥を魔法によって—— どういう訳かレンヒェンは魔法が使える——最初はバラの木に変え、自らはバラの花に変身する。魔法や魔法の道具による変身は、人間を鳥や動物に変えたりするのが主流なのであるが、人間を別な人間に変えたりすることもある²⁷⁾。この場合は人間を植物に変えるという術を使う。次にみつけ鳥を教会に変え、レンヒェンは(教会の)シャンデリアに変身する。ここでは人間がものや建物に変わってしまうというとんでもない変身が現出している。最後にレンヒェンはみつけ鳥を池の水に変え、自分は鴨に変身する。人間を(池の)水に変え、自らは鳥に変身している。第一の変身から第三の変身のいずれも女の子であるレンヒェンが主導権を握り変身術を使用し、しかも女主人公のレンヒェン自身が変身後も前面に出てきてみつけ鳥が後景となっている。悪い魔女と見なしうる料理人の老婆は、はじめはみつけ鳥を煮て食べようとするのであるが、変身後は、前景に目立つ形で出現してきているレンヒェンを食べようとしているように見える。すなわち、レンヒェンは愛するみつけ鳥を守るべく自身の危険をかえりみず変身して、より危険な状態に身をさらしているのである。最後の三回目の変身において、料理人の老婆が池の水を飲み干そうとする時、鴨に変身したレンヒェンが魔女の老婆を水で溺れさせてしまう

のも、女主人公のレンヒェンの魔女との積極的戦いとも言えるし、自分の愛する水になったみつけ鳥が飲み込まれてしまう前に、敵(魔女の老婆)を倒そうという意志の現れと見なすこともできる。このように「みつけ鳥」においては、女主人公が積極的果敢に魔法を用いて魔女に立ち向かっている様子が描かれており、この女主人公レンヒェンは決して受動的消極的女性像ではない。しかしながら、マレーン姫やりこうな百姓娘の主人公とも異なり、魔法によって敵と対峙する。または難題を解決する。自分の人間としての能力や知恵や力を活用する積極的能動的主人公ではなく、魔法の力を借りつつ行動し、敵を倒し、問題を解決する第三のタイプの女主人公なのである。

主人公である本人がほぼ何にもせず、まわりで起こる出来事や、まわりの人間や周囲の状況の変化(動物やものの力による変化も含む)によってのみ難題を解決し、敵を排除していく女主人公にとっての受動的(物語)の筋の運びではなく、またその反対に、女主人公自身の自立自立した知恵や行動による運命の好転による筋立てでもなく、魔法や魔術の力を借りて運命を切り開いていく女主人公の物語という第三の筋の展開、筋の運びが考えられる。

第一のタイプを受動的女主人公、第二のタイプを能動的な女主人公とすると、第三のタイプは、半分受動的——魔法を使うということ——かつ半分能動的であり、両者の中間型ということで、中動的な女主人公の物語と行うことができる。「みつけ鳥」の主人公レンヒェンは第三の中動的な女主人公のタイプということになる。

この「みつけ鳥」²⁸⁾は子供たちが主人公の物語なのであるが、「ガラスの棺」²⁹⁾の主人公(男)は仕立屋であり、主要登場人物で女主人公とも言えるべきお姫様は、上述の第三のタイプの中動的ヒロインと行うことができる。実は男の主人公の仕立屋は、ここでは特に自分で積極的に何かするという訳ではなく、すなわち、自分の才覚や知恵や勇気や行動や力で困難を解決してい

く人物ではなく、ほとんど「白雪姫」や「灰かぶり」の女主人公と同等の役割しか与えられていない人物である。グリム童話において男性が主人公の物語では、確かに、魔法を使うにしろ使わないにしろ、積極果敢で活動的で陽気なヒーローが女性よりは多数登場する。これは、先程の用語を使えば、男性版能動的主人公（ヒーロー）と言える。それに対して、物語の筋の進行にはほとんど関わりを持たない、言わば、受動的男性主人公（ヒーロー）が登場することがある。しかしながら、このような登場人物が男性版究極の受動態となるかと言うと、大抵の場合、女性版で言う、中動的男性主人公にとどまる。というのは、男性の側が女性の主要登場人物、女主人公を嫁にして物語がハッピーエンドになるケースが多いので、男性主人公が何もせず、何も得られないということは物語上成立しにくいのである。物語の中でそのような男性群、たとえば、何も獲得できない王子たちは、姫のために命を落としたり、課題に失敗したりして主要登場人物にはなりえないという物語の構造上の理由からである。このことは、当然フェミニズム批評の側からの攻撃材料となるのであるが、別な観点から見れば、マレーン姫にしろ、かしこい百姓娘にしろ、男性の主要登場人物は女主人公に対してほぼ何もしていないか、むしろ、敵対関係（マイナスの親縁性）を形作って出現しているのである。昔話においては、王子は権力者側の代表であり、王子が登場人物としてそこに存在するだけでプラスの価値を持つことになるので——女性主人公に敵対しない限りは——グリム童話の物語上は受動的男性主人公の物語のタイプは成立しにくいと言える。

「ガラスの棺」の仕立屋は物語上必要な人物ではあるが、筋立ての中の重要要素ではあるが、筋を積極的に動かしていく登場人物とは言えない。森の中で道に迷った仕立屋は、白髪の小人のところ泊めてもらい——泊めてもらう時にしつこく食い下がるぐらいの行動しか彼はしていない——寝ている最中に物音で目が覚め、

黒い牡牛と美しい鹿の激しい戦いを見、牡牛——実は魔法使い——を倒した鹿に連れられて岩戸の中の大広間に入り、そこで、そのさらに下の大広間に降り、ガラスの棺を二つ発見する。その際も、仕立屋が自分の判断や知恵を用いて何かするというのではなく、彼を導く声の指示する通りの行為を行うだけの、まさに半分受動的、半分能動的存在なのである。一方のガラスの棺には、まわりの環境も含むお城が小さくなって入れられていて——SF的には、周囲も含む城が実寸大の次元を超越してミニチュアになって棺の中に入っている——主人公の仕立屋は興味深く見る。〈受動的対応〉もう一つの棺には、立派なマントにくるまったように金髪をからだ全体にまとったきれいな娘が横たわっていて、目は閉じて入るものの、顔の色は生き生きとしていて、リボンが揺れ動いていて、生きている様子を読み取れ、³⁰⁾ 棺の中の娘からの要請もあって、棺の錠をはずす。〈積極的能動的対応〉

この髪でからだ全体をおおうというある種幻想的でエロティックな描写は、「泉のそばの女」³¹⁾のお姫様（末娘）が、自分の顔に魔法でかぶさっていた皮を脱いで、泉でからだを洗うと、「まるで太陽の光みたいな黄金の髪の毛がさっとマントのように広がって、からだをそっくりくるんでしまった。」³²⁾「がちょう番の女が泉のあたりへ行って、皮を脱いでからだを洗うと黄金の髪の毛がさっと垂れてきて、その女の人のきれいなことは、生まれて一度も見たこともないくらいであった。」³³⁾という描写や、「池の中の水の精」³⁴⁾で、粉屋が養魚池の中でからだを洗う水音を聞く「肩越しにきゃしゃな両の手で抑えていた女の長い髪の毛は、両脇に垂れ下がって、白いからだを隠していた。」³⁵⁾という箇所池の水の精の描写に通じるものである。エロティックな描写を極力消し去ってきたグリム童話の中でも消しきれなかった大人向けの部分なのであろう³⁶⁾。

さて、「ガラスの棺」³⁷⁾の物語にもどろうと思

う。眠りから覚めて仕立屋の前でマントを着たお姫様は、ミニチュア化したお城をガラスのケースから取り出して、周囲の環境ごととの自然の大きさ（実物大）にもどし³⁸⁾、——この昔話の想像力には驚かされる——ガラスの入れ物に入っている青い煙になった人間も——人間たちが集団で青い煙（気体）になっているという気体への変身というアイデアにも感心させられる——もとにもどる。

これらすべては、女主人公と言うべきお姫様と一緒に仕立屋が行ったことであり、隠れた真の行為者、影の主人公と言うべき人物は、魔法使いによって鹿に変身させられた女主人公のお姫様の兄である。この物語の場合、仕立屋は当然能動的主人公ではありえないのであり、むしろ、女主人公であるお姫様の方が前に述べた中動的ヒロインと言うことができ、また、仕立屋および鹿に変身した王子（お姫様の兄上）も中動的ヒーローと言うべきであろう。残念ながら、兄の王子が能動的主人公になりえないのは、やはり、仕立屋の手を借りなければ難題を解決できないからであり、魔法使いを倒した王子は、積極的な面もあるが、魔法使いを安易に信用してしまう弱い面も持ち——それゆえに鹿に変えられてしまう——お互い助け合う中動的ヒーローと見なすべきであろう。

ここに登場するお姫様は、魔法使いの求婚に応じず拒否する強さを持ち、兄に魔法使いの悪計を伝えようとする積極的面があり、化物のような魔法使いをピストルで撃つという勇敢なヒロインである。この点だけに着目すると、能動的な女主人公とも言えるのだが、兄や仕立屋との協同作業で魔法を解いていくので中動的な女主人公（ヒロイン）にふさわしい人物である。

3.

このように、いばら姫や白雪姫の受動態に対して、マレーン姫やこのような百姓娘の能動態があり、「みつげ鳥」のレンヒェンや「ガラスの棺」

のお姫様の中動態といった形態を想定することができる。

そして、レンヒェンや「ガラスの棺」の姫の中動態の形態は別な形でグリム童話の中に出していると言える。

一連の結婚でハッピーエンドにならない物語の中にそれが認められる。たとえば「森の三人の小人」³⁹⁾では、継母が継娘に、冬の真っ最中に、紙の着物を着せて、森の山イチゴを手かご一杯取って来るように言う。現代では、冬、ハウス栽培などでイチゴを作ることができるが、これは完全にグリム童話の中の無理難題の解決話の一つである。森の三人の小人によって、親切な娘はこの難問を解決し、さらに森を通りかかった王様の眼鏡にかなない、結婚することになる。ただ、この物語は結婚でハッピーエンドとはならず、一年後、男の子を産むところから、二番目の災難に遭遇する。継母と妹の悪計によって、鴨となったお妃は、料理番の若い衆を通して王様にもとの姿にもどす方法を示唆し、本当のハッピーエンドを迎える。森の小人の力や変身という魔法を通してであれ、女主人公の娘の——特に物語の後半の子供を思う気持ちがうかがわれることから——強い意志を確認できるので、中動的ヒロインの物語と言える。

また「からす」⁴⁰⁾は、魔法でからすに変身させられた王女が、名前のない——職業、身分の情報もない——ただ〈男〉と表現されている男の主人公を導きつつ、減らないパンや肉やぶどう酒を与え、指輪をはめ、男が三つの魔法のアイテムである杖とマントと馬を用いて、王女のいるガラスの山の城にやって来るまで待っているという話である。王女が積極的に無名の男に魔法のアイテムや指示を与え、男が自ら魔法のアイテムを手に入れ王女を救い出すという物語の構造であり、からすの姿の王女の能動性とガラスの山の王女の受動性の両者が混じり合った中動的な女主人公（ヒロイン）像を読み取ることができる。

また「王様の子二人」⁴¹⁾では、大男の王様に連

れてこられた主人公の王子が、王様の三人の娘の助けを借りて最初の仕事を片づけ、さらに末娘の助けを借りて、つづく三つの難題をやりとげる。末の娘と逃げ出した王子は、末娘の魔法で、最初は、王子が茨のやぶに、娘がバラになり、二度目は、王子が教会になり、娘が牧師になり説教し、父王を追い返す。最後に母であるお妃がやってきたので、王子を池にし、娘は魚になる。お妃も連れ戻すのを諦め、娘にくるみを三つ与える。その後、王子は末娘のことを忘れ、遠くの国のお嫁さんと結婚することになる。苦労を重ねた末娘は、母のくるみによって、三度立派な着物を着て王子の前に現れ、三度目に自分のことを王子に思い出させ、結婚する。

この物語では、主導権を握っているのはほとんど末娘の王女であり、魔法あるいは魔法のアイテムさえ使用しなければ、積極的能動的な女主人公とも言える存在なので、典型的な中動的ヒロインである。もう一人の主人公の王子は、女主人公と比べると受動的立場にあるが、両者とも結論的に言えば中動型主人公である。

「泉のそばのがちょう番の女」⁴²⁾においては、金持の伯爵がおばあさんの荷物を大変な苦労して家まで運ぶ。おばあさんは親切な魔法使いで、王様とその末娘の仲違い、不和を最小限の魔法を使って解消し——それにも三年間かかったのだが——若い伯爵と末娘を結婚させる。伯爵も末娘の王女も中動的な主人公（ヒーローとヒロイン）であり、ここでは、おばあさんの役割が重要である。

「池の中の水の精」⁴³⁾においては、粉屋が水の精（女性）と約束したために、猟師になったその息子が水の精のいる池の中に引っぱり込まれ、猟師の妻が白髪のおばあさんのくれる魔法のアイテム群、黄金の櫛、黄金の笛、黄金の糸車を用い、夫を助け出すが、池の水が追いかけてきて、おばあさんの助けで二人ともかえるに変身し、命が助かり、水が引いた後は人間の姿にもどる。長の年月離れ離れで互いを見ても思い出せない元夫婦は、笛の音によって思い出し、

ハッピーエンドとなる。

これは結婚後の苦難の話であり、また妻の必死の思いがあり、妻は能動的な登場人物と言えるが、おばあさんの魔法の力を借りる話なので、中動的な主人公の話となる。

おわりに

以上述べてきたように、グリム童話には、「いばら姫」や「白雪姫」など究極の受動的な典型としての女主人公を持つ話と、究極の受動とまでは言えない、受動的な女主人公を持つ話には確かに多い。一方、その対極にある「マレーン姫」や「りこうな百姓娘」などの能動的な女主人公の話のほかに、その中間的な形態である「みつげ鳥」のレンヒェンや「ガラスの棺」の王女といった中動的な女主人公を設定する試みも面白いのではないかと考えた。

グリム童話の女性像に対してのみではなく、男性像に焦点をあてると、大概男性中心の話ではあるが、動物寓話や創世神話を別にする、男性主人公も、必ずしも自分の力、自力で難題を解決するという訳ではなく、魔法や魔法アイテム、または援助者の力を借りて難業をやりとげている。勿論その際、勇気、気力、意志、賢さ、能力などは必要な場合が多い。

しかしながら、数は少ないけれど、女性像に着目すると、女性像も男性像と同じように徳目を読み取っていくことが可能である。そして、部分的に、女性中心の物語も存在している。グリム童話の原型話の中に、歴史的材料、話の素材の中に、元々、民衆の中の女性の力が宿っていたのかもしれない。

グリム童話の、能動的でもなく、受動的でもないという意味での、中動的な主人公（特に女性）を、仮説として、一般的に想定できるのかどうか、今後、さらに考察を深めていかなければならない。

ANMERKUNGEN

- 1) KHM 50
- 2) KHM 53
- 3) 鈴木 (1991) S. 178
- 4) ダイアナ・コールスの『アリーテ姫の冒険』については、鈴木晶氏が池田香代子氏に、「日本では売れたが、イギリスでは誰も知らない。」と言っている。〔ユリイカ (1999. 4) S. 92〕
- 5) レレケ (1990) S. 37
- 6) 有馬 (2003) S. 16-S. 43
- 7) ザイプス (1997), ペロー (1995), バジーレ (1995) 参照。
- 8) KHM 51
- 9) KHM 161
- 10) 鈴木 (1991) S. 187ff. ユリイカ (1999. 4) S. 92
- 11) KHM 198
- 12) ...und die Jungfrau Maleen sprach zu ihrem Vater: »ich kann und will keinen andern zu meinem Gemahl nehmen.« [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 404]
- 13) KHM 56
- 14) ...und weil es ihm gefiel, fragte er, ob es ihn heiraten wollte, aber es antwortete: »Nein«, denn es wollte seinem liebsten Rohland, ... [Diederichs (1997) Bd. 1 S. 271]
- 15) KHM 94
- 16) Doch erlaubte er ihr eins, sie sollte sich das Liebste und Beste mitnehmen, was sie wußte, und das sollte ihr Abschied sein. Sie sagte: »Ja, lieber Mann, wenn du's so befehlst, will ich es auch tun«, und fiel über ihn her und küßte ihn und sprach, sie wollte Abschied von ihm nehmen. ... [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 24]
- 17) KHM 198
- 18) KHM 56
- 19) 継娘は最初恋人ローラントを湖に変え、自分は鴨になり、次に、自分を茨の生垣の真中に咲いている花に変え、恋人ローラントをバイオリン弾きに変える。
- 20) KHM 111
- 21) Lieber Vater, dafür, daß ich den heiraten soll, will ich lieber in die Welt gehen, so weit, als mich meine Beine tragen. [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 99]
- 22) 「森の家」では、心底からやさしくて、人間だけでなく、けものたちにもやさしくてやる娘が来ることによって魔法が解ける。この貧乏な木こりの三人娘の末娘も能動的な主人公(ヒロイン)と言えるのではないか。[KHM 169]
- 23) KHM 51
- 24) KHM 163
- 25) KHM 51
- 26) この話の〈みつげ鳥〉 Fundevogel は男の子か女の子かは正確には不明であるが、レンヒェンが Fundevogel に問いかける「お前が私を見捨てなきゃ、私だってお前を見捨てないよ。」 »Verläßt du nicht, so verlaß ich dich auch nicht.« に対して、Fundevogel が「とんでもない、そんなことありえない。」 »Nun und nimmermehr« と答えることによって、通常は男の子と解している。女の子と解すると、女の子同士の愛情の確認ということになって、同性愛的側面が色濃くなってくるためか、レンヒェンという女の子と Fundevogel という男の子と解されているようである。もう一つの可能性としては、ドイツ語の Fundevogel (Vogel) が男性名詞ということの類推もあるのかもしれない。しかし、厳密には、Fundevogel の性別は物語上は確定しない。ちなみに、他の物語でも同性愛的側面の物語はあるが、そのほとんどが兄弟姉妹における愛情であり、他人同士の場合はほとんどないので、KHM 51 「みつげ鳥」は希有な例と言えるかもしれない。グリム兄弟自身、Jacob も Wilhelm も兄弟愛のとても強い絆で結ばれていたもので、兄弟姉妹的愛情の強さを表す表現はあるが、同時に、兄弟姉妹同士の、血で血を洗う醜い争いの物語も多々あるので、一般化はできない。むしろ、兄弟姉妹愛の強い場合か、あるいは、兄弟姉妹間の憎しみ、殺意の強い場合かの両極端化している物語が多いと言える。
- 27) 「森の家」では、若く美しい王子が白髪の老人に変身させられている。また召使い三人は斑の牝牛の姿に変身させられている。[KHM 169]
- 28) KHM 51
- 29) KHM 163
- 30) Es lag wie im Schläfe und war in lange, blonde Haare wie in einen kostbaren Mantel eingehüllt. Die Augen waren fest geschlossen, doch lebhaftes Gesichtsfarbe und ein Band, das der Atem hin und her bewegte, ließen keinen Zweifel an ihrem Leben. [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 272]
- 31) KHM 179
- 32) ...da quollen die goldenen Haare wie Sonnenstrahlen hervor und breiteten sich, als wär's ein Mantel, über ihre ganze Gestalt. [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 329]
- 33) Wie erstaunte er aber, als sie zu dem Brunnen trat, die Haut ablegte und sich wusch, als die goldenen Haare über sie herabfielen und sie so schön war, wie er noch niemand

- auf der Welt gesehen hatte. [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 331]
- 34) KHM 181
- 35) Ihre langgen Haare, die sie über den Schultern mit ihren zarten Händen gefaßt hatte, flossen an beiden Seiten herab und bedeckten ihren weißen Leib. [Diederichs (1997) Bd. 2 S. 336]
- 36) このほかにも、KHM 57「黄金の鳥」で、主人公である末の弟の王子が、「夜中にあたりの者が寝静まった頃、美しいお姫様が湯殿に入ったとたんにとび出してキスをした。」という場面や、KHM 193「太鼓うち」で、女主人公が「肌着を返してください。」という場面や、KHM 94「りこうな百姓娘」の中で、「はだかで魚を捕る網に入る。」という描写などがある。
- 37) KHM 163
- 38) 「森の家」では、魔法が解け、古い森の家が王子たちの住む御殿に変わる。このように、小さな家が大きなお城に変化するというスケールでの魔法は何箇所か見受けられるが、ガラスのケースのお城が実物大に変わるというのははじめてである。[KHM 169]
- 39) KHM 13
- 40) KHM 93
- 41) KHM 113
- 42) KHM 179
- 43) KHM 181

LITERATURVERZEICHNIS

TEXT

- Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Artemis Winkler Verlag. München Zürich 1997.
- Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Bd. 1-2. Eugen Diederichs Verlag. Frankfurt a. M. 1997.
- Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1-5. Insel Verlag. Frankfurt a.M. 1997.
- 小澤俊夫訳: 完訳 グリム童話[全2巻]—子どもと家庭のメルヘン集—(ぎょうせい) 1999.
- 金田鬼一訳: 完訳 グリム童話集[全5冊] (岩波書店) 1991.
- 関 敬吾・川端豊彦訳: 完訳 グリム童話[全3冊] (角川書店) 1999.
- 野村 滋訳: 決定版 完訳 グリム童話集[全7巻] (筑摩書房) 2000.
- 吉原高志・吉原素子訳: 初版 グリム童話[全4冊] (白水社) 1997.

LITERATUR

- Gallwitz, Esther: Schneewittchensapfel. Frankfurt a.M. 1999.
- Rölleke, Heinz: Die wahren Märchen der Brüder Grimm. Frankfurt a.M. 1992.
- ジョン・M・エリス著/池田香代子・薩摩竜郎訳: 一つよけいなおとぎ話 (新曜社) 1993.
- ダイアナ・コールズ著/グループウィメンズ・プレス訳: アリーテ姫の冒険 (学陽書房) 1997.
- テオドル・ザイフェルト著/入江良平訳: おとぎ話にみる死と再生 (新曜社) 1991.
- ジャック・ザイプス著/廉岡・横川・吉田訳: 増補 赤頭巾ちゃんは森を抜けて (阿咩社) 1997.
- マリア・タートル著/鈴木・高野・山根・吉岡訳: グリム童話—その隠されたメッセージ—(新曜社) 1994.
- ロバート・ダントントン著/海保真夫・鷲見洋一訳: 猫の大屠殺 (岩波書店) 1996.
- ジャンバットィスタ・バジーレ著/杉山洋子・三宅忠明訳: ペンタメローネ (大修館書店) 1995.
- S・ビルクホイザー・オエリ著/氏原 寛訳: おとぎ話における母 (人文書院) 1989.
- スーザン・ブラウンミラー著/幾島幸子訳: レイプ・踏みじられた意志 (勁草書房) 2000.
- ブルーノ・ベッテルハイム著/波多野完治・乾侑美子訳: 昔話の魔力 (評論社) 1995.
- ウラジーミル・プロップ著/北岡誠司・福田美知代訳: 昔話の形態学 (水声社) 1991.
- シャルル・ペロー著/新倉 朗訳: 完訳 ペロー童話集 (岩波書店) 1995.
- ルース・ポティックハイマー著/鈴木・田中・広川・横山訳: グリム童話の悪い少女と勇敢な少年 (紀伊國屋書店) 1991.
- マックス・リュウティエ著/野村 滋訳: 昔話の解釈 (筑摩書房) 1997.
- マックス・リュウティエ著/野村 滋訳: 昔話の本質 (筑摩書房) 1994.
- ハインツ・レレケ著/小澤俊夫訳: グリム兄弟のメルヘン (岩波書店) 1990.
- 相沢 博: メルヘンの世界 (講談社) 1969.
- 有馬哲夫: デイズニーの魔法 (新潮社) 2003.
- 小澤俊夫: グリム童話の誕生 (朝日新聞社) 1992.
- 鈴木 晶: グリム童話 (講談社) 1991.
- 高木昌史: グリム童話を読む事典 (三交社) 2002.
- 高橋健二: グリム兄弟 (新潮社) 1980.
- 野村 滋: グリム童話 (筑摩書房) 1990.
- 野村 滋: グリムの昔話と文学 (筑摩書房) 1997.
- 浜本隆志: ねむり姫の謎 (講談社) 1999.
- 森 義信: メルヘンの深層 (講談社) 1995.
- 森島恒雄: 魔女狩り (岩波書店) 1979.
- 日本独文学会: ドイツ文学 第86号 (郁文堂) 1991.
- イマーゴ: 特集 メルヘンの深層 (青土社) 1996年4月号.

ユリイカ：特集 グリム童話（青土社）1999年4月号.